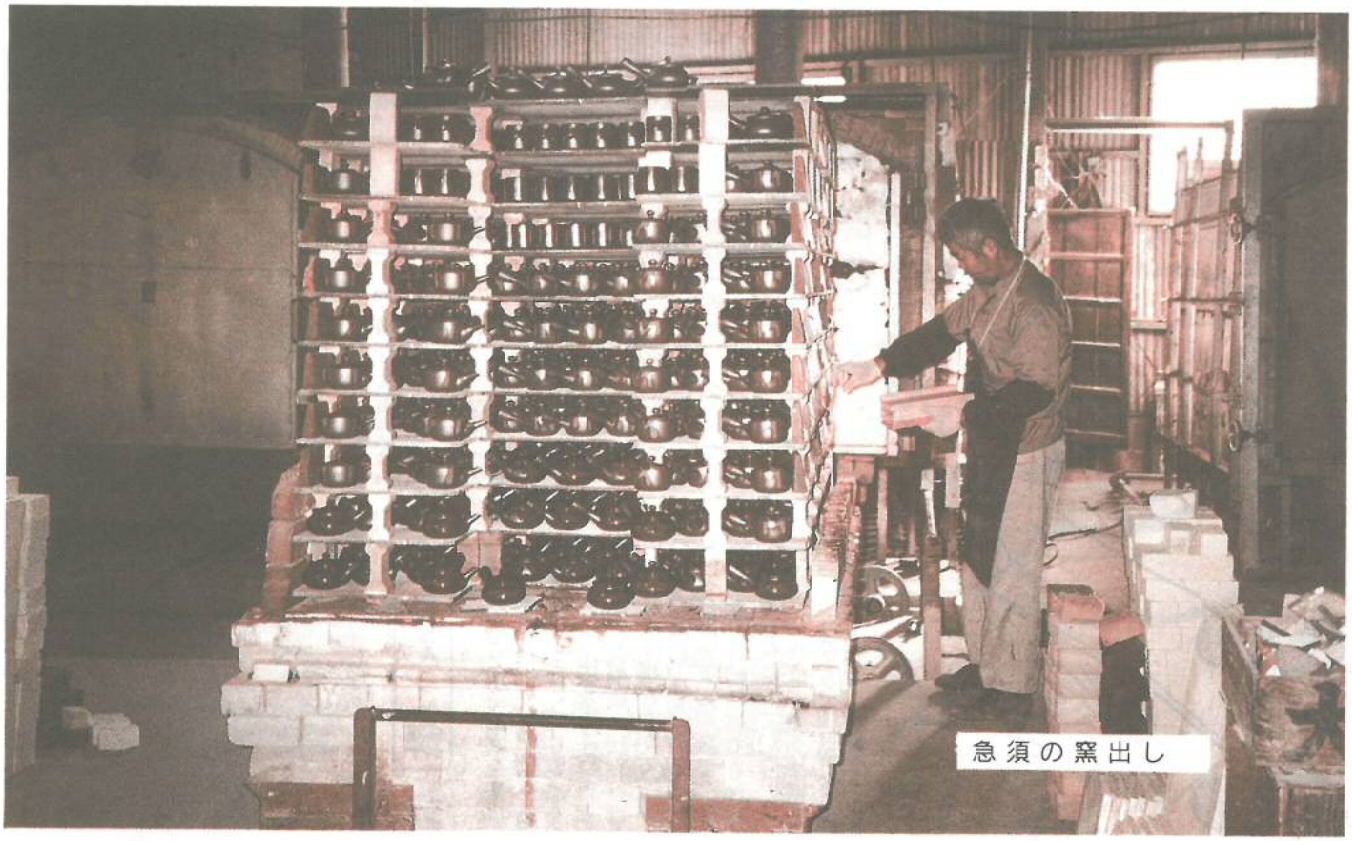
平成８年３月　第20号
海蔵社協通算　第41号

地区広報　かいぞう


急須の窯出し

黒煙はく、つつ柱
林のごとく並び立つ

海蔵小学校の校歌のように、立ち並ぶ煙突から吐き出される黒煙は、萬古焼きの隆盛を物語り、荷車、トラックで運ばれる生地、リンゴ箱に詰められた製品の山、ガラガラと回る原料を精製する機械の音、庭先に天日干しにされた無数の石膏型、海蔵地区の多くの家々でも、何らかの焼き物に関わる内職がおこなわれ、たくさんの人々の手仕事によって生産が支えられていました。

これは、江戸の時代より明治・大正を経て発達してきた萬古焼が最も活気に満ちた、昭和三十年頃の海蔵地区の状況です。

元文元年（一七三六年）に創始されたといわれる萬古焼は茶陶に優れ、その技法は多くの人々の研究と工夫によって受け継がれて来ており、現在では食器、花器など暮らしに密着した実用品はもとより、工芸品としても愛用され、昭和五十四年急須等が国の伝統工芸品に指定されています。

このような私たちの身近にある萬古焼も時代と共に製品内容の移り変わり、製造過程の近代化、円高による輸出の不振、構造的な不況を迎え、現在では、新鮮な感性を持つ多くの若い人々の力により、新しい活路を見いだす努力がなされています。

郷土の地場産業として栄えてきた萬古焼産業のなかで職人と言われる技術を持った多くの人々の苦労、思い出話を聞き当時の様子を探ってみました。

海蔵地区の人口　総数 11,306　男 5,653　女 5,653　世帯数 3,916　（２月末現在）

編集・発行　海蔵地区社会福祉協議会・海蔵地区市民センター　印刷　北勢印刷㈲

萬古焼きを支えた人…ひと…ひと

誇りたかき職人さんの昔語り（昭和30年代をふり返って）

いくつもの人の手を経て、人々の手元へと…たった一つの萬古焼も
伝統を守り継ぐ職人さんの手仕事のつみ重ねから。

土鍋など

急須

陶土
土こし
土練

製型

成形
手ろくろ
動力
い込み
型づくり

素焼き

彫刻加飾

土こし

陶土を作る人

垂坂山から採取した土と青岩粘土を白く乾かし、水に溶かし、細い網で濾し、素焼きのかめに入れる。ある程度乾いたら瓦に盛り、足で踏み手でもんで、手ロクロで製品化した。

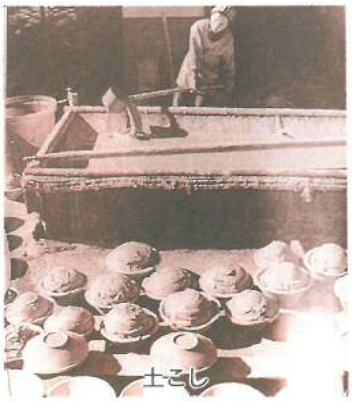
「真冬でも素足で踏む仕事は今では想像もつかないほど、辛い仕事やったなァ」

その採取地も今は大半住宅地となっている。

型師

型にはロクロの型と、流し込みの型があり、型は石膏で造られるが、型師になるには約一〇年近い年月をかけて修業し、親方より一人前と認められ独立を許された。

冬は冷たい水に手を入れ、夏は石膏の熱さに汗をにじませ、原型を作る為の土の縮みに神経を使う仕事に辛抱できず辞めていく人も多かった。


土こし

おんこ師

手ろくろを使って成形をする人

問屋からの型見本を基に土の縮みを考慮し、土を踏んで、菊もみし、狂うことなく同じ製品を作る。その数は茶碗なら一日百個以上。二～三日乾燥後の仕上げは糸底を作るので手間がかかる。

当時は、朝八時から夜九時迄、冬は練炭火鉢一個で、休みは一日と十五日だけ。でも、その技術は高く評価されていた。

「昔は、よう仕事したなァ。今でも茶碗百個なら作れるね。でも、お金をもらうとなるとなァ……」そこには、おんこ師としての誇りが今も息づいていた。

成形のいろいろ

い込み

手ろくろ

型づくり

下回し

キズを見分けたり、ほこりを払ったり、各部所の忙しい所を廻る下働き屋さん達がいた。当時は若い女性達が従事し、「景気が良い」とたくさんの人々が、阿倉川駅からあふれでたという。職人技ではないけれど細かい分業を更に支えた。

動力師

石膏型を、動力で回転させ、コテで成型する。

一時間くらいで型を抜き仕上をする。

三〇年代は九寸火鉢なら一日に一五〇本以上作った。

「当時は請負制で、型の抜き具合と仕上の是非で腕の善し悪しを問われたものや」

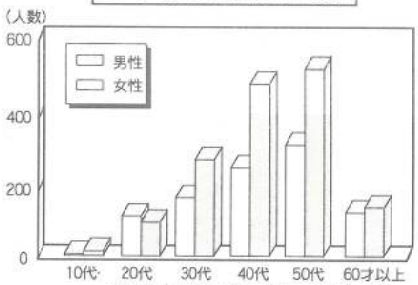
一本当り九円くらい。景気も良くてなかなか土が手に入らなかった。

動力

戦前の萬古工業地帯 ―あがる黒煙が萬古の活況を示す―

現在も残っている煙突

年代別就業者数



(1991年) 資料 (のびゆく四日市版) より

絵付け師

絵付けには量産のための転写銅版、ラバースタンプなどの絵付けと、盛り絵、かき絵など量産にはむかない専門技術を必要とするものがある。絵付けは女性の労力が多く、浮きでた模様に流れ作業で彩色したり、絵がよれないよう、転写（写し絵）でカップや皿に模様を写した。

窯たき

窯の焚き始めは柴（雑木の小枝）を焚き、温度が上がると薪を燃やす。山積みにされた薪を一晩のうちに使い果たす程大量に使用した。その後石炭に変わったが、窯場の労働は夏場においては灼熱地獄であり、汗にまみれて行なわれ、一定の温度を保つため多くの窯口を走り回る作業は気の遠くなる重労働であった。

昭和四〇年代からガス窯、電気窯になり、あの懐かしい黒煙を吐く煙突は見られなくなった。

問屋さんの活躍

戦後一～二年間は物も不足で商品も取り合い状態であったが、その後昔通り全国への売込みが始まった。

現品見本の入ったリュックや竹籠を背にその後、革で出来た肩掛け式の見本鞄が登場し、随分と楽になったが、それでも二〇キロ余りを肩に、例えば東京方面だと、満員の夜行列車の通路や洗面所で往復し、商人宿に泊まりながら、月に半分程度は集金と売込みの旅を続けた。

これが、昭和三〇年代半ばより車となり、現在は展示会、カタログ、ダイレクトメールと、販売方法も変遷しているようだ。

彫刻師

昭和二〇年代、一〇年位修業の後一人前となる。修業時代の日当は世間の五分の一程で、他の窯屋へのアルバイトで妻子を養った。当時市内には十数人の彫り師がいて、急須などの彫刻をしていた。特定の窯屋には属さないで、注文により、仕事を引き受けていた。注文があるたびにその窯屋に出向いたりして、独自の技量を発揮し、絵や文字の彫りに精を出した。

絵付け

施釉

焼成

製品に合う温度

検査

包装

出荷

萬古不易

いつまでも変わらない永遠の命を託して……

その昔、たび重なる海蔵川の氾濫で、小作人を救う目的から、萬古焼きはこの地に根づいた。歴史が育み、経済発展と共に様変わり、後継者不足、不況等の問題をはらみながら、今もその伝統の火を辛抱強く守っている。しかしその陰には、数多くのひたむきな労働があったことを忘れない。かって内職をする祖母や母の後姿が今日の萬古焼に重なる。いつまでも郷土の産業と関わってゆきたい。街のここかしこで、萬古焼と接してゆけたらと思う。そんな街づくりが出来れば良いと…。

カメラルポ

カメラがとらえた地域活動

まだまだいっぱいあるけれど
これはごく一部です。

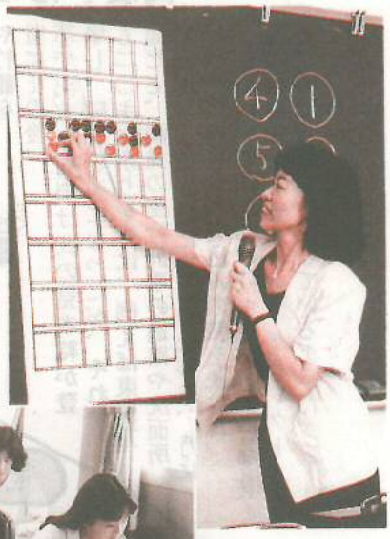
▲二世代交流
紙飛行機よ～く飛んだかな　6/24

▲ 環境月間
海蔵川へ
コイの稚魚放流　6/6

音楽会

▲海蔵文庫20周年を祝して　ギターの調べ
（ミニコンサート）12/16

▲国際理解講座より　10/24
～響きは国境を越えて～中国琵琶とギターの
日中友好のハーモニーが～



▲福祉体験教室
5/8

障害者の方へより理解
を深めるために……

▲ 祝　しらさぎ橋完成　7/29　三代渡り初め

てんじ
教室

わたしたちの街のエキスパート

エッ～究極の細工「ミニ盆庭」

溝脇　勝義さん（西阿倉川）

皆さ～ん、コンニチワ。

ミニ盆庭ってご存知ですか？

センターの受付カウンターに、飾られています。一度ご覧あれ……。

そのミニ盆庭制作者の、溝脇勝義さんをご紹介します。

溝脇さんは、以前、新聞でも紹介されたチョットした有名人です。

プロフィールを紹介しますと、本業は万古彫刻師で号は松楽さんと言います。

ほかにも、庭園管理士の資格を取得したり、建具師の経験など多彩な技術所得者です。

今回は、ミニ盆庭をつくられるようになったきっかけやご苦労についてインタビューしてみました。

ミニ盆庭を造ろうと思ったきっかけは？

お正月にどこの家でも飾る盆栽が正月を過ぎると表で枯れて捨てられているのを見て、何か利用できないものかと常々かんがえていました。

いつ頃から始められましたか？

六、七年前より手掛けてましたが、納得の行くものが出来るようになったのは、ここ二～三年です。

製作時のご苦労は？

大きな物とか、茅ぶきの家は粘土で作るのですが、屋根の色つまり『茅』の色を出したり、人物を作るにしても若い人、老人、子供、それぞれの特徴を出すのが難しいです。それと家にはめる建具を作るのに試行錯誤しました。

構図はいつお考えですか？

今まで、自分の家で出来なかった事を盆庭で実現しているのです。

出来上がった作品は？

皆さんに貰っていただいています。

これからの抱負は？

樹医の資格も最近、取得しましたし、夢がどんどん拡がっています。

と、少年のように目を輝かせて話してくださいました。これからも、健康で益々よい作品を作っていただきたいと思います。

皆で怪獣をやっつけよう

お母さんと仲良くネ

すご～い剛力で頑張っている

玉は何個入ったかな

うまく転がりますように

転ばず仲良くイチニ、イチニ、

「海蔵の寺社」シリーズ その⑦

多度神社

国道一号線海蔵橋北詰の東側に現存する、旧東海道に面し鎮まります社が、地元の人々の崇敬篤い、三ツ谷の『多度神社』です。

桑名郡は多度神社の御分霊を拝戴し、天津彦根命をお祀りしてあります。

伝説や神社由緒の記録によりますと……

昔三ツ谷は、大字東阿倉川に属し三津家（海蔵小誌などによると、三屋・三家・三ツ家）と称し、天明（二百十余年前）の頃より多度大社を崇敬する念慮篤く、毎年日を定め暁に起き一番鶏の鳴くのを合図に、住民打ち揃い羽津・大矢知・伊坂を経て参拝するのを習わしとしていたが、文化（百九十年程前）年間、例年の如く参拝のため鶏鳴を合図に出発しかけたとき、計らずも放火を発見し全員馳せつけ消火。またその後も参拝の都度、失火を発見し消火など、災害を未然に防ぐ出来事が重なり、「これ大神の御神徳ならん」と、崇敬の念は年毎に大きくなっていき、その想いは代々受け継がれ、遂に明治拾八年この地に社を創建、大社の御分霊を奉迎し遷宮祭が斎行されました。以来百拾余年三ツ谷の産土神として、奉斎、住民の篤い信仰をうけています。

その間、明治四十年三重県訓令により、海蔵村大字東阿倉川字宮之内村社飽良川神社（現、海蔵神社）に合祀のうえ、飽良川神社と単称されましたが、地元住民の崇敬の念止みがたく、社殿等そのままに遥拝所として年々祭儀を斎行し、御神徳を拝謝していたが、昭和二十年六月十八日戦災により焼失、二十五年五月現在の社殿を造営して復興、翌年二月十二日、正式に三ツ谷の『多度神社』として承認をうけ今日に至っております。

例祭は五月五日で、子供神輿も町内を練り盛大に斎行されております。月例祭は毎月第三日曜日と、氏子代表の奉賛会役員の方々の献身的なご奉仕に、地元住民の皆さんがこの神社に寄せる、崇敬心の篤さをみる想いがします。

また、神社縁起伝説の狐が棲んでいたと言う、旧東海道の一里塚と称した神社付近の松の大樹は、道路改修などで伐採され、往時を偲ぶ面影はありません。

SOS ノーモア！いじめ Stop!

子どもからのSOSをキャッチしよう！

愛知県西尾市の東部中学校で起きた**『いじめ』**による自殺事件以来、全国各地でいじめが原因とみられる自殺事件が跡を絶ちません。四日市市においては、こうした最悪の事態には至っていませんが、毎年何件かのいじめの発生が報告されています。

いじめは、**『暴力』『ひやかし』『からかい』『仲間外れ』**などの形で主に表れ、今日のいじめの特性として、

☆動機がきわめて感情的で、ストレスや不満の解消のためにする。

☆いじめ方が陰湿。

☆ゲーム感覚でいじめるので、うしろめたさや罪の意識がない。

こうした「いじめ」を受けている子どもたちのSOSのサインを早期に発見しなくてはなりません。

とくに、家庭では

☆衣服の汚れや破損。

☆よくけがをし、その傷をかくす。

☆学用品の紛失、破損。

☆言葉づかいが悪くなり、家庭においては反抗的になる。

私たちは、こうしたサインを絶対に見逃してはなりません。

いじめはどこの家庭でも起こりうる状況にあり「自分の子どもでなくてよかった。」という第三者的な立場でなく、他人の子どももわが子と同様に考えて、地域と学校が連携していくことが、今まさに必要とされている。

そこで、平成七年度より海蔵地区青少年育成協議会が中心となり地域の関係団体、委員、小中学校の担当の先生方十五名で構成する**【海蔵地区青少年ネットワーク】**が発足、いじめをはじめとする青少年問題の情報を交換し、問題点などを話し合う場が設けられました。今までに四回の会議を開催してきたが、今後もこの組織を中心にして地域ぐるみの健全育成活動の推進が期待されている。

編集後記

地区広報『かいぞう』を年二回（十月・三月）発行することになって二年になります。毎回、試行錯誤をくりかえしながら広報部員一同頑張っています。

今回は地区の伝統産業、『萬古焼』を特集してみました。

さまざまな分野で活躍された先人、先輩達の苦労があったればこそ、今の萬古焼の世界があるのではないでしょうか……。